

あげじゃびよ～外伝

木村 国
(財)自然環境研究センター

AMSL anecdotes

T. Kimura

阿嘉島臨海研究所（AMSL）設立 20 周年、おめでとうございます。私がいる頃、まさかこの研究所がこんなに長寿とは思わなかった。何せ、いわゆるコンサル仕事は一切せずに好きなサンゴの研究だけやっていれば良かった。つまり、われわれ研究員はまったく稼いでいなかつたので・・・。私が AMSL に所属していたのは 1990 年から 3 年弱。10 数年前の当時の懐かしい思い出とその後のあゆみを振り返ってみよう。

その前にまず、少し自己紹介を。私が AMSL に入ったのは、大学を出るときに就職から逃れるために青年海外協力隊としてトンガ王国で 2 年半過ごした後、サンゴの勉強がしたくて AMSL 本部である東京の熱帯海洋生態研究振興財団の（マンションの）モンをたたいたのがはじまり。確か 1989 年の末ごろ。五反田の事務所で保坂三郎理事長から話を伺うと、研究所は外来の研究者に利用してもらうよう宿泊施設があり、そのメンテナンスや研究者のアシストをしながら、その合間にサンゴの研究をしてもよろしい。島で生活できるぐらいの給料は払う。つまりは、好きな研究をさせてもらひながら（決して高くはないが）給料をもらって最低限生活は維持できるという、いわばサンゴ研究の修行寺といったところだった。当時まだ、サンゴのサの字も知らなかつた私は、早速雇つてもらって阿嘉島に引っ越した。

研究所では宿泊施設の一部屋を居室にあてがわれ、食事は食堂のコックさんに作つてもらう。もちろん、外来研究者用のフランス料理（研究所の自慢の一つが、「フランス料理が食べられる臨海研究所」）では

なく、従業員用のまかないメシだ。しかし、食事を作る時間が省け、研究に当てられることを考えると十分にありがたかった。

もちろん、研究所を維持する仕事、つまり外来の研究者が利用するための宿泊施設・研究施設のメンテナンス、宿泊者のための掃除からベッドメイキング、給仕、調査のアシストなどはしなくてはならなかつた。当時はそんな仕事をしながら「何で俺たちが・・・」などと思っていたが、今考えるとあれだけ好き勝手に研究をさせてもらつていたのだから、その位するには当たり前である。文句を言っていたのは、若気の至りであった（理事長、申し訳ありません・・・）。

研究の方は、日本でのサンゴの産卵研究が始まつたばかりの頃で、阿嘉島周辺のミドリイシ類の一斉産卵のタイミングを調べるべく、4 月から 9 月ごろまで毎晩、ニシハマとヒズシハマにわかつて産卵チェックをしていた。台風が接近して波が高い日などつらくなかったと言えばウソになるが、それよりも誰より先にサンゴの産卵が見られるという興奮の方が大きく、楽しくてしょうがなかつた。

その頃の研究所には林原 毅氏と下池和幸氏が研究員として働いていた。今でこそ二人に生意気な口を利くようになっている私だが、二人は実は、サンゴのいろはを教わつた私の師匠である。緻密な頭脳派で、慎重に慎重を重ねて熟考するタイプの林原氏と、一見優男風なのに体力勝負ではかなうもの無し、いつでもマイペースな下池“トライアスロン”和幸氏とのベスト・コンビに加わつた新入りの私が、う

ろうろ騒ぎまわって二人の足を引っ張っていたといふところ。

林原氏は当時から大変に丁寧な物腰の人物で、新人の私に対してもとても丁寧に研究所の体制について説明された。しかし、その中身は一種強情ともいえる、大変に骨太な性格である。特にサンゴのことになると、しばし眉間にしわを寄せ、首をかしげ始めると、長い。なかなか結論が出ない。いや、そもそも結論などそっちのけで、頭の中で一人議論が始まる。例えば、サンゴについて学び始めたばかりの頃、林原氏にミドリイシの標本を手渡し、「これ、formosa か nobilis か、どっちですかね?」と聞いたことがある。林原氏はどれどれと標本を手にとり、「うーん…」と一言うなるなり、首をかしげてうんともすんとも言わなくなつた。手にした標本を試すがめつ、その間 10 分か 20 分か。そして結局、「ミドリイシはねえ、分かんないなあ~」。そのとき悟った。この人は安易に結論を出さないのだ。

また、普段の低い物腰からはうかがえないが、実は大変にバンカラな一面もある。その頃、AMSL のスーパーバイザーであった東京水産大学（現東京海洋大学）の大森 信教授（現 AMSL 所長）の研究室の学部生や大学院生が卒論などの研究のために夏休みに手伝いに来てくれることがあった。そんなときには、大学の先輩の顔に戻って、「お前ら何やってんだよ」とちょっと乱暴な言葉遣いで後輩を指導し、女子大生の胸をキュンとさせたとかさせないと…。

もう一人の研究員である下池氏は、当時からもう、ある種有名人だった。いつもニコニコ、ちょっと舌足らずなしゃべり方で母性本能をくすぐる、お坊ちゃんタイプだが、実は超人的なマッチョ。西表島の網取にある東海大学の臨海研究所にいたころには、毎日、泳いで網取から白浜あたりまで、1日かけてミーバイのサンプリングをしていたとか、漂流はがきの実験中、陸地が見えなくなるほどの沖合で船外



1992年頃のスナップ

機が故障して漂流した時には、「ボク、助けを呼んできます」と、いきなり船から海へ飛び込むと研究所へ向かって泳ぎ出し、数時間後に本当に救援隊を連れてきたりと、その武勇伝は半ば、伝説化していた。また、大学卒業後に八重山にいたときには、初めて出た自転車レースでいきなり優勝し、沖縄県で開催される国体の選手になるべく、強化選手として那覇に連れて行かれ、自転車屋に籍を置きながら練習していたとか、第1回の石垣トライアスロンで優勝してしまったとか、アスリートとしての華々しい経歴も数知れず。阿嘉島でも毎月1回、「モニタリングしてきます」と朝、カロリーメイトやバナナなどの栄養補給材をウェストバッグに入れ、周囲約10 kmの阿嘉島を、1日かけてスノーケリングで1周しながら、ニコノスで海中の様子を記録したり、自転車の練習に、途中の坂では軽トラでもローギヤにしてヒーヒー言うような、マエノハマからクシバルまでの山道を、1日中何往復もしたりと、島の若い人たちからもその超人的な身体能力の高さに一目おかれていた（年寄りからは、「シモイケは子供みたいに泳いだり自転車乗って遊んでばかりで、何してるかねえ」とまったく理解されていなかったようだが…）。また、甘いマスクとトライアスロンで鍛えた、ロダンの彫刻ぱりの鋼のような肉体美で、当時阿嘉島に来ていた若い女性ダイバー達を何人もト

リコにしていたのは、地元ダイビングショップの間でも有名な話だ。

当時の職員として、もう一人忘れてならないのが、コックの上林利寛氏。先代コックの満田氏のあとを継ぎ、1991年から阿嘉島の厨房に入る。ひょろっと背が高く、山口のイントネーションでいつも寝起きのようにゆっくりしゃべる、朴訥を絵に描いたような人。結構ハンサムなのに浮いた話がでないのは、そのあまりにマイペース過ぎる生き方ゆえか。研究所に来た当初こそ、外来の研究者に供する料理の研究に余念がなかったものの、いつの間にか阿嘉島の蝶の観察と鯨の撮影に命をかける、阿嘉島滞在歴最長の特別研究員と化してしまったようだ。

そんな上林氏の特技はギターの弾き語り。一時は島の若い人とバンドを組んで夜な夜な練習し、友達の家や居酒屋でライブ活動もしていたらしい。私も数年前、久しぶりに家族で阿嘉島を訪れた際、上林氏のバンド仲間の家でご馳走になり、数曲弾いてもらつたが、素人の宴会芸などではなく結構聞かせるので驚いた。あれで朴訥なしゃべりに突っ込みを入れてくれる相棒が見つかれば、阿嘉島の「ゴンチチ」としてブレイクするかもしれない。

そうそう、もう一人、どうしても忘れてはならない人が、研究船の船長だった、モトチのおじさんだ。当時研究所には久場島など少し遠いところの調査のため、「もと丸」という5トンの漁船があり、その船長を地元の金城英盛さんにお願いしていた。阿嘉島には金城姓が多いが、英盛さんのオタクは本家筋に当たるため、島の人たちからは「モトチ」と呼ばれており、われわれもそれにならって「モトチのおじさん」と呼んでいた。当時研究員は、朝は宿泊室と研究室の掃除、その後に自分たちの研究や外来の研究者が来ればそのアシストと、1日のほとんどを研究所の中すごし、食事も研究所の中ですませていたので、島の人と接する機会がほとんどなかった。

そんな中で唯一島の情報、ウワサを伝えてくれるのが、この「モトチのおじさん」だった。「みどりいし」1号から3号まで連載されていた「あげじゃびよ～」のタイトルは、このモトチのおじさんの口癖（というか沖縄の一般的な感嘆語なのかもしれないが、当時初めて沖縄で生活するわれわれの耳には、おじさんの強烈なキャラクターとこの言葉が一体となって、相当なインパクトで頭にインプットされてしまったので、「あげじゃびよ～」と聞くと、反射的におじさんの、少し怒ったように目を剥いた顔が思い浮かぶようになってしまっていた）からとられた。その第2号に掲載されている「マララーおにぎり」という漁師料理のように、沖縄の海人（うみんちゅ）や食べ物など、聞く話聞く話がみな新鮮で面白かった。おじさんはとても器用で、漁具の修理からマンゴーの栽培、アヒルの飼育まで何でもこなす、まるで歩くメイクマン（メイクマンとは沖縄の大手ホームセンターの名前。実験器具を作る材料に足りないものがあれば、とりあえずメイクマンに行けば何とかなる、Do It Yourselfの強い味方）のような人。それ



モトチのおじさんとミッキー

だけに、他人が自分と同じようにできないでいると、とたんにイライラと怒り出し、「あげじゃびよ～、何してるう。もう、いいから貸しなさい、貸しなさい。何にもできないんだから、アンタたちはー！」と、われわれにやってくれと持ってきた用事も（その用事も、実はほとんどが研究や研究船のメンテナンスには関係ない仕事で、マンゴー園の垣根の修理やなんだか分からぬ道具のねじ穴あけなど）、結局自分で片付けて帰ってしまうことなどは日常茶飯事。それも、われわれが研究室や宿泊室の掃除などをしているときに限ってやってくる。最初はかならず大声で「シモイケ！シモイケはいるか！」とまず下池さんが呼ばれる。

そんなおじさんに、いつになく優しい声で、「お～い、誰かいるかね～」と呼ばれたときがあった。研究室から出てみると、いきなり「アンタたち、タンクあるか？」と聞かれた。もちろん、常に充填しているので「ある」と答えると、「じゃあ、それもって船に来なさいよ」という。一体どこに行くのかたずねると、「アンタたち、久場島見たくないか？あそこはサンゴがキレイだよ」という。あんまり唐突な話だが、ここで逆らって次に調査に出たいときに断られては困るので、「いやー、是非見たいですね。いえ、前から一度、行きたかったんです」なんて調子を合わせて、潜水機材を持ってもと丸に乗り込んだ。で、船が走り出してしばらくすると、おじさんは「あそこに島が見えるだろう。あれが久場島で、昨日おじさん、このあたりでイカ釣りしてたら、あげじゃびよ～、針がひっかかってしまったさー。擬餌針はおじさんが上手に作ったのだから、大変よ。とーっても良く釣れる擬餌針だから、取りに行かんと、大変よ」って、えー？、おじさんは引っ掛けたイカの擬餌針を取りに来たかったの？「ハイ、シモイケ、着いたよ。何してやるの、早く用意して用意して。この下に引っかかっているはずよ。この青い、

これと同じだから、すぐ分かるはずよ。早くとてこないと潮が変わるよ」。せかされる下池さんも素直にタンクをつけてバックロールで海中に。さすがはおじさん、ピタッと、自分の擬餌針を引っ掛けたところの真上につけていたので、擬餌針はすぐに見つかった。

そうそう、おじさんのエピソードといえば、そのおかげで、いまだにあんまり積極的に食べたくはなくなってしまったものが、ポーク・ランチョン・ミートである。沖縄に来た当初、ゴーヤチャンプルー やおにぎりなどに使われているポークランチョンミートを、ものめずらしさも手伝って盛んに食べていた。その塩加減がご飯にあうし、研究所の朝食の定番でもあった。そんなある朝、いつものように突然おじさんが研究所にやってきた。「おーい、シモイケ！シモイケはいるか！」との声にみんなで食堂から降りていくと、おじさんが愛犬ミッキーをつれてきていた。「あのね、おじさん明日から那覇に行って来るからね。おばさんも一緒にいくから、ミッキーを預けていこうね。はいはい、おとなしいから大丈夫大丈夫」といって犬の引き綱と一緒にスーパーの買い物袋に入ったポークランチョンミートの缶詰を渡された。おっ？いつもは用事を言いつけられるだけなのに、今日はお駄賀付きか、と思っていると、「これはミッキーのえさだからね、毎日ちゃんとあげるんだよ。余ったらアンタたちも食べていいからね」。なんと、われわれの好きだったポークランチョンミートはミッキーのえさだったのだ。それ以来、あの缶詰を見るたびに、ミッキーと一緒に、ひとつどんぶりからランチョンミートを食べている図が頭に浮かんでしまい、なんとなくポーク玉子おにぎりなどに手が出なくなってしまったのである。そしてランチョンミートはわれわれの間で「ミッチーハム」と呼ばれるようになった。

さて、そんな古きよき阿嘉島時代を過ごしたわれ

われのその後はというと・・・。

林原氏はご存知のように、阿嘉島でのサンゴの産卵生態などの研究で博士号を取得され、水産庁に採用、今や水産庁から独立行政法人になった西海区水産研究所の石垣支所で、サンゴの専門家として活躍されている。

下池氏は長らく AMSL に勤めた後、めでたく結婚され、奥様と静岡で子育てをする傍ら、沖縄や沖ノ鳥島など、日本中のさんご礁を回って相変わらず精力的に調査をされている。しかし、最近はよるトシナミか、トライアスロン練習中に自転車から落車して鎖骨を折ったり、肩が上がらなくなったりと、アノ下池氏の体力にも少々かけりが・・・。

一番できの悪かった私も、何とかいまだにサンゴ関係の仕事で食いつないでいる。AMSL を出た後、JICA の専門家として再びトンガに赴任したり、専門家派遣会社に籍を置いたりしながら、海中公園センターに採用。そしてその解散に伴い、自然環境研究センターに移ってサンゴ関係の調査研究を担当している。

上林さんは、今でも料理長（といっても料理人は一人しかいないけれど）として AMLS で腕を振るっている、というか、蝶と鯨の特別研究員が本職で、その合間に食事を作っているのだろうと推察するが・・・。

モトチのおじさんは、数年前に引退されたと聞いたが、お元気だろうか。ますますのご健勝をお祈りしている。

まあ、こんな愛すべき人たちと一緒にすごした AMLS は、今も岩尾氏、谷口氏、上林氏のほか、新たに加わったスタッフたちとが、更なる伝説を作りつつあることだろう。日本で最も活発にサンゴ研究を行っている研究機関として、世界に誇れる AMLS のこれからのご活躍を大いに期待して筆をおく。

追伸：

当時の阿嘉島の周りのサンゴは、それはもう素晴らしいの一言。昔の思い出が心の中でだんだん美化されることを割り引いても、ミドリイシ類の被度の高さ、魚の豊富さ、水の美しさといい、私は一目でヤラレてしまった。数年前に久しぶりにニシハマを泳ぎ、オニヒトデに躊躇されたあと、見る影もないサンゴを見て大変に心が痛んだ。しかし、昨年あたりからはオニヒトデも見られなくなったそうで、こちらもこれからの回復に期待したい。

※なお、この話はフィクションではありませんが、著者の記憶を頼りに執筆したため、多少の事実誇張があるかもしれません。ご了承下さい。